

## 見田宗介著『現代社会はどこに向かうか ―高原の見晴らしを切り開くこと』

岩波新書（2018年）

労働組合による生活実態調査は、労働者の生活の実像を明らかにするとともに、直面する現下の生活課題を見出すことを意図している。調査での基本的な設問の1つに、現在の生活全体に対する満足度に関する設問がある。例えば、本号で取り上げている連合生活アンケートをみると、64%が現在の生活に満足としている。同比率は2000年代には4～5割台だったが、2010年以降は60%を下回ったことがない。生活に対する評価は長期的にみると上昇トレンドにある。このような傾向は連合生活アンケートに限られたものではない。世間一般を調査している内閣府の『国民生活に関する世論調査』をみても、2003年以降、同様の傾向がみられる。生活に対する評価の高まりをどのように理解すれば良いのか？

このような生活満足度の上昇など既存の意識調査に表れている変化を、“脱高度成長社会の精神変容”のなかに位置づけ、理解を試みているのが本書である。著者によれば、生活満足度の上昇は、日本ばかりでなく、ヨーロッパ、アメリカにおいてもみられる。

日本の新しい世代の精神の変化を取り上げた〔1章 脱高度成長期の精神変容―近代の矛盾の「解凍」―〕では、NHK放送文化研究所が実施している日本人の意識調査に依拠して考察が進められていく。著者は調査をもとに「1970年代から2010年代までの青年の変化つまり、脱高度成長期に人間を形成した世代の精神を、かつて高度成長期を担った世代の精神と比較」して、①「男女の性別役割分担（男は仕事、女は家庭）を基本とする『近代家父長制家族』の解体」、②『生活満足度』とくに物質面における満足度の増大と、関連して、『結社闘争性』の鎮静、あるいは『保守化』、③「<魔術的なるもの>の再生、あるいは、合理主義的な世界像のゆらぎ」（<魔術的なるもの>とは、あの世、来世を信じる。奇跡を信じるなど）に注目する。

〔2章 ヨーロッパとアメリカの青年の変化〕では、1981年に開始されたヨーロッパ価値観調査、そして同調査が拡大展開された世界価値観調査に依拠して考察が進められていく。調査から「西ヨーロッパ、北ヨーロッパを中心とする高度産業社会において、経済成長を完了した『高原期』に入った最初の30年位の間、青年たちの幸福感は明確にかつ大幅に増大している」ことを見出す。

筆者はこれらの変化を無関係なものとして捉えず、全体統合的な把握しようと試みる。すなわち「戦後復興期から高度経済成長期をとおして日本の家族は戦う集団」であり、「生のあらゆる領域における<合理化>の貫徹」が生存に必須であった。そこでは「現在の生を、それ自体として楽しむのではなく、未来にある『目的』のための手段として考える」ことが求められてきた。しかし、「物質的な『経済成長』の課題は、すでにほぼ達成され」、「生産主義的、未来主義的、手段主義的な『合理性』への圧力の一挙の減圧という局面を、史上初めて迎え」る。そのなかで「加速しつづける『進歩』と『発展』と『成長』を追い求めてきたステージに固有の価値観」は過去のものとなり、「経済に依存しない幸福の領域の拡大」とともに、「シンプルなもの、ナチュラルなもの、持続するものに対する志向」が拡大してきた。それが著者の見立てである。

著者はこの成長期から安定平衡期への移行を、原始社会から文明／近代社会への移行に匹敵する、人類史上における2度目の巨大な曲がり角とみる。そして、『現代社会』の種々の矛盾に満ちた現状は、『高度成長』をなお追求しようとする慣性の力線と、安定平衡期に軟着陸しようとする力線との、拮抗するダイナミズムの種々層として統一的に把握することができる」と指摘する。

本書をそのまま調査に活かすことは難しいが、その論考から触発される点は多々ある。“慣性の力線”と“軟着陸しようとする力線”の拮抗という捉え方は、職場、家庭、地域など、私たちの日常生活の実像把握に役立つだろう。また、安定平衡期における幸福の実像、そして曲がり角における拮抗の実像をいかに捉えることができるか？これからの調査・分析における挑戦的な課題となりえるだろう。（小熊 信）